

12

漢字学習に生きる書写指導

新しい指導を考える会

「漢字学習」と「書写の学習」は、どちらも文字に関する学習です。しかし、子どもたちの意識の中で、これらはどの程度結び付いているのでしょうか。多くの場合、それぞれが全く別の学習として認識されているのではないかと思います。

もし、これらを有機的に関連づけることができれば、より効果的に子どもたちの文字意識を高めることができるはずです。そのために、どのような意識で書写指導を行うとよいか考えてみましょう。

1 はじめに

「教材文字をつくりの作品を完成させる」——それがゴールの書写学習は少なくありません。もちろんそれだけでも子どもたちはその時間、文字をじっくりと見つめ、丁寧に美しく文字を書こうという意識をもつわけですから価値はあります。しかしこの場合、ねらいはあくまでも「作品作り」ということになってし

まうため、漢字学習、つまり日常に生きて働く力を育てるのは難しくなります。書写で学んだことを漢字学習に生かすには、まず、毎時間の書写の授業の終わりに、子どもたち自身が「今日はこれを学んだ」ということをしっかりと理解できている必要があります。つまり、教材文字をつくりに書くことを目的とした学習展開ではなく、「文字の原理・原則」を学んだうえで書いて確かめる学習を展開する必要があるということです。そうす

ることで、応用でき、日常に生きて働く力を育むことが可能になります。

では、「文字の原理・原則」を学ぶ書写とはどのようなものなのでしょう。五年「文字の組み立て方（かまえ）」の実践を通して考えてみたいと思います。

2 導入

「子どものつまずきや？」を大切に

学習のスタートは、子どもたちの学習意欲に火をつけることから始まります。「分かりたい」「できるようにしたい」という気持ちは、「文字の原理・原則」に迫るうえで欠かすことができません。そこで、いくつかの工夫が必要なのです。

■身につけさせたい力の明確化

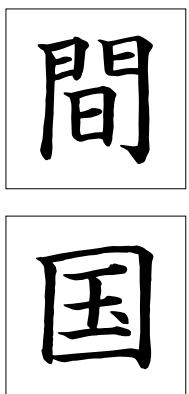
子どもたちは、全体的な完成度の高まりを書き文字に求める傾向にあります。教師もまた、欲張ってしまい、つい多くの学習要素を詰め込んでしまいがちです。しかし、このような意識で授業を行っていくと、結局その一時間でどんな力が身についたのかがぼやけてしまい、分からなくなります。まずは、子どもたちに身につけさせたい力はなんなのかを明確にする必要があります。それが直接、評価にもつながっていきます。

■課題文字の吟味

「かまえ」のある文字の組み立て方は「かまえ（外側）」の中に「内側の部分」

が「収まるように書く」ことを学びます。

「かまえ」は、「内側の部分」が収まりやすいよう、そのスペースを意識しながら書き、「内側の部分」は、「かまえ」の中に収まるよう小さめに書く必要があります。「かまえ」には、「もんがまえ」や「くがまえ」など、いくつか種類がありますが、どの文字を課題にするかによって、学習効果が変わります。「あれ？ うまく収まらない！」という、子どもの「困り感」が大きいほど学ぶ必要性が高まるのです。では、次のうち、より学習効果が高いのは、どちらの文字でしょうか。



実際に試したところ、子どもたちの「困り感」が大きく、学習効果が表れたのは、「国」のほうでした。「国」は、最後の一点で「かまえ」を閉じて「玉」の部分を完全に中に収めなくてはならないからです。毛筆文字の場合、多くの子は、最後の一点が「玉」の部分とぶつかってしまい、うまく閉じることができません。そこで、「なんとかしなくては！」と、「収

まるように書く」ことに目を向け始めるのです。

一方、「間」は、下方が空いているため、たとえ「日」の部分が多少「もんがまえ」からはみ出していても、子どもたちの問題意識にはつながりにくいといえます。そのため、子どもたちは「収まるように書く」といういけば大切なポイントとは違った部分に目を向けてしまうのです。

このように、よりシンプルに目標に迫るためには、子どもの思考に沿った課題文字を選択することが重要です。

■試書

試書のしかたによってもまた、子どもたちの「困り感」は変わります。「国」のような、簡単に誰もが迷わず書けるような文字の場合、教科書の教材文字を見ずに自力で書いてみるという方法もあります。「簡単な文字のはずなのにうまく書けない」という現実が、「なんとかしたい」という思いを生むのです。

逆に、教材文字を見てもなお、「うまく書けない」「ポイントとなる部分に気づきにくい」という文字もあります。そういう場合は、あえて教材文字を見ながらの試書を取り入れるのも効果的です。

3 分かる

次に、どんなところにつまずいたのかを全体で交流し、「閉じられない」「ぶつかった」などの問題に焦点化していきました。そして、『かまえ』の中にうまく収めるにはどうしたらよいか」という共通の課題を設定します。子どもたちは、課題に沿って、試書でうまくいかなかった原因を分析します。その際、基準となるのが教材文字です。教材文字と自分の試書を比較し、気がついたことを教材文字に書き込ませます。

気づいたことを出し合わせると、子どもたちはまず最初に「内側の部分の『玉』のために『かまえ』の中の余白を広くとる」ことに目を向けました。具体的には、「縦画を長く」「縦画を真つすく」「縦画の右側を長く」などです。このように、内側の部分をうまく収めるための方法を発見し、「できそう」という見通しをもつていきます。

その後、早速、分かったことを生かして書く練習をします。その際、「自分は、縦画が内側に傾いて下の方が狭くなっていたから、縦画を真つすく書くことを目標にしよう」というように、自分の課題

を明確にすることが大切です。ネームプレートなどを用いて、板書に位置づけるのも効果的です。

練習を進めていくと、「かまえ」の中の空間を広くとっているにもかかわらず、最後の一面が閉じられない、「玉」の下空間が狭くなるなど、新たな課題を見つかる子が出てきました。中側の部分を大きく書きすぎるのが原因です。

そこで、その子の課題を全体で共有しました。すると、子どもたちの目は、「かまえ（外側）」から「玉（内側）」に向かい始めました。「かまえ」だけではなく、内側の部分も意識して書くことが大切であることに気づきます。このようにして、ようやく子どもたちは「収まるように書く」ことにたどり着くのです。

4 分かる↓できる

「収まるように書く」ことに気がつくことで、子どもたちの書く文字は、徐々に「玉」がしっかりと収まった「国」に近づいていきました。

しかし、それでもなお、うまく書けず悩む子が多くなりました。頭では分かつ

5 評価

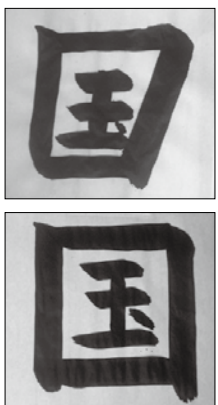
最後に、この一時間の変容を自己評価させます。評価すべき点は、「内側の部分の『玉』がしっかりと『くにがまえ』の中に収まっているか」ということです。



▲「国」の最後の一面を取り除いたもの。

「ビフォー・アフター」と称して、学

習の最初に書いた試書と学習の最後に書いたまとめ書きを比較します。これにより、子どもたちは「こんなにも変わった」と、自分の変容に心から満足します。それが、大きな自信となり、次への意欲につながるのです。



▲上が試書で下がまとめ書き。組み立てようとして書けるようになってきている。

6 掲示

掲示方法を工夫することで、子どもたちの意欲を高めることも可能です。大抵は、まとめ書き一枚を掲示するものですが、この「ビフォー・アフター」（試書とまとめ書き）を並べて掲示し、その変化を価値づけます。その際、「縦画が真つすくになって、『玉』の入る場所ができたね」「縦画を長くすることで、『玉』の下に空間ができたね」というように、この学習の目標に合った評価コメントを付

けると、より効果的です。

このように、評価や掲示に至るまで、ただ上手に書けたというだけではなく、『かまえ』のある文字の組み立てでは「収まるように書く」ことが大切」という意識がとぎれないよう工夫することが大切です。それにより、子どもたち自身、「身につけた力」がなんなのかをしっかりと理解することができるようになります。

7 「身につけた力」を使う

「国」という文字を通して、「かまえ」のある文字の組み立て方を学んだ後は、この「原理・原則」を他の文字に応用させます。

これまで習ってきた漢字を中心に、まずは「くにがまえ」をもつ漢字を洗い出します。そして、「収まるように書く」ことや「最後の一面を書く前の空間」などを意識し、硬筆で書いてみます。また、同時に「くにがまえ」以外に「もんがまえ」など、身近な「かまえ」のある漢字にも発展させていきます。そうすることで、日頃使っている多くの文字に、今回

ているのにできないのです。ここで、「分かる」「できる」につながる関わりが必要になってきます。そのためには、具体的なイメージを示すことが大切です。

写真のように、「国」を、最後の一面を残して「玉」まで書いた段階で提示するのです。これにより、下の部分にこんなにも広い空間が必要なのだということが気づかせることができます。子どもたちからは「えっ！ そんなに？」という驚きの声が上がりました。これで、一気に「分かる」が「できる」に変わります。

学んだ「原理・原則」が生かせることを実感できます。

さらに、それらを画用紙などにまとめて掲示しておけば、新出漢字の学習を行う際、関連する「原理・原則」を振り返りながらバランスよく美しい文字を書く意識を高めることができます。書写の学習が日常に生きる大切な学習であることを実感できるでしょう。

8 まとめ

「つまり↓分かる↓できる↓実感・自信」、これが、学びの実感を生む授業の仕組みです。

子どもたちが、必要感をもって学ぶことができるよう、思考の流れに沿って学習を組み立てることで、「文字を見る目」、つまり、文字意識を育てることが可能になります。

このように、書写の時間が子どもたちにとって、「文字の原理・原則」を一つ一つ獲得する時間になっていくことは、日々の漢字学習や日常生活に生きて働く力を育むことにつながるものと考えます。